



Subaru

男声合唱団

ニュース No.181 09. 9. 17



資料 男声合同曲「光のエチュード」 関西合同曲「我が窮状」

「光のエチュード」の ナニワの歌う巨人「パギヤン」はこんな人



写真提供は橋本さんから

■自己紹介 (前略)

「日本に來られて長いのですか？」と訊かれることが多い。「そうですね、祖父の代からですから、かれこれ80年になりますね」と答えると、「どおりで、日本語がお上手だ」とか「韓国語は喋れますか？」と来る…俺は、大阪生まれで日本語のネイティブ・スピーカーぢゃ。日・韓・英の3ヶ国語はお前より上手いワイ！と怒鳴りたくなる。世間一般では理解しがたいらしい。

「立派な体格ですね」(注;182cm、体重百余キロ)と言われることが多い。「そうですね、ずっと柔道をやってまして、講道館二段ですから」と言うと、「ご健康でなにより、羨ましいです」と来る…俺は、子供の頃結核にかかって難儀したし、右目は失明しているので一応「障害者」のハシクレである。世間一般には理解しがたいらしい。

さて、今書いたようなことが日々縷々あって、そして様々な事情や時代を経て、この頃私は「浪花の唄う巨人・パギヤン」と自称している。(中略)要するに、「ワタシヤ、世間ではフツとちやう」んや…その自覚があるから「浪花の唄う巨人・パギヤン」を使う。「唄う巨人」の異名は、なかなか心地よいものだ。

愛称「唄う浪花の巨人」。大阪市西成区出身、在日韓国人2世。大学でロシア語を、大学院で教育学を専攻。元・関西大学、河合塾講師。ブルース・ジャズ・ロック・フォークは勿論のこと、朝鮮や韓国の古典民謡やニホンの浪曲も得意で、年間ライブ数は百回に迫る。2002年から「歌うキネマ」を始め、一本の映画を独りの唄と語りで演じている。演目は「ホテル」「マルコムX」「風の丘を越えて」「砂の器」「パッチギ！」など。

私は自分の音楽を「闘いの音楽」と言ったが、その理由について次のような説明をしておきたい。「マイリティが排除されるのは、しばしばマジョリティの確立した<人間>の基準外にあるとみなされるからである。その判断はしばしば幻想的である。(中略)またその判断は、しばしば現実的な葛藤に対する忌避に根ざしている。マイリティに対する様々なタイプの判断や知覚は、自己や自分の集団や、あるいは一般に「人間」の意識と相対的である。(中略)マイリティは、人間がどんなふうに生命を迎え、生命を排除しているかという問いをもって生きざるをえない。

それは政治の問いであり、創造とはなにかという問いであり、そしてカフカが予言したように「生死」にかかわる「問い」である。私もハシクレとして、その「問い」を供出している。日々のライブや CD 製作、大小のメディアへの露出は、常に「問い」なのだ。「癒し」や「娯楽」ではなく、まず「問い」なのである。畢竟[ヒッキョウ]するに「闘い」だ。客と対峙する己と、二重三重に向かい合って、「問い」を表現する。「癒し」や「娯楽」は、そのアクチュアリティのなかからしか出てこない。

・・・「唄う巨人」の名前に相応しい、「闘い」が作り上げた奥深い人物のようです。上の記事は、インターネットで検索できる「パギヤン」に関する沢山の記事のほんの一端です。

# 関西合同曲「我が窮状」によせて

京都新聞

2009年(平成21年)5月3日 日曜日 の記事

京都市出身の歌手沢田研二さん(60)が還暦を迎えた昨年、自ら作詞したバラード曲「我が窮状」を発表した。詞は、あえて「憲法」や「九条」という言葉を使わずに

平和への思いを伝える。なぜ今、ジュリーはこの曲を歌うのか。憲法記念日に合わせて、胸の内を聞いた。

(聞き手 三好吉彦)

## 危うさの足音

憲法記念日インタビュー

昔から平和への思いはありました。デビューしたころはベトナム反戦とかで学生運動が激しく、同世代の多くはデモをしていたわけですから。でも僕は表立っては言えなかつた。だつてジュリーと呼ばれ、「君だけに愛を」とか「モナリザの微笑」を歌っている男が平和や憲法を語ってもにあわないでしょ。商業ベースに乗った奴が何言うてんねんと言われるのが落ちと思っていた。六十歳になった今なら、言いたいことを言ってもいいかなと。憲法は米国から与えられたと言う人もいるけど、歌にも入れたように、「英霊の涙に交えて 授かつた宝だ」と思います。特に惹かれるのは九条の戦争放棄の部分。やられたらやり返す」じゃ

さわだ・けんじ 1948年生まれ。67年にザ・タイガースでデビュー。20年からソロで活動。21年に「勝手にしやがれ」で日本レコード大賞受賞。昨年は還暦記念で大阪と東京ドーム公演を開いた。今年7月18日に京都都会館でコンサートを開く。「我が窮状」はアルバム「ロックンロール マーチ」に収録されている。

### ジュリー平和を歌う

ない。一対一のケンカと国同士の戦争は違う。戦争は望まない人まで巻き込む。家族が犠牲になったら「国のために」で済まないでしょう。安倍晋三首相の時、改憲論が盛んに出た。今も九条が窮状にあることに変わりはない。大つぴらに九条を歌詞に入れるのは気が引けるので、歌は「我が窮状」と題してアルバム「九曲目」に収録した。憲法とか大きな問題に対し、個人の力はちっぽけなもの。でも、言葉には出さないけど九条を守りたい

## 若い世代に、背中を見せていきたい

と願う人はいっぱいいる。「僕も同じ思いですよ」とサインを送りたかった。「諦めは取り返せない過ちを招くだけ」ですから。僕は戦争を知らずに育った。それでも、子どものころ、四条畷で傷痍軍人さんがアコーディオンを弾いていたし、進駐軍もいた。母校の第三錦林小(左京区)や岡崎中(同)では、いつも授業脱線する面白い先生がおり、時代が変わったから、こんな話もできるようになった」と言っていた。



「この歌を歌って、憲法を思っている人がいっぱいいるんだと分かった。ずっと歌い続けたい」

「忌まわしい時代に 遡るのは賢明じゃない」と思う。

もちろん北朝鮮の脅威もある。でも、先日のミサイル騒動で、日本が迎撃していたらどうなっていたか。僕は、相手が対話に応じなくても、大きな心で接したほうが人間として大きいと習った。一時的には損かもしれない。でも「損して得取れ」という諺もあります。年齢を重ねた者が若い世代に何かを伝え、礎石とならないといけないでしょう。一市民として、歌を通して発言し、背中を見せていきたい。

掲載紙をスキャンしてそのまま載せようとしたのですが、判読しづらいので、原文のまま転記しました。ただしジュリーの写真は京都新聞掲載のものと異なります。記事提供は若園さん。